

# ゆずの話

小川未明

青空文庫



お父さんの、大事になさっている植木鉢のゆずが、今年も大きな実を二つつけました。この二つは、夏のころからおたがいに競争しあつて、大きくなるうとしていましたが、二つとも大きくなれるだけなつてしまつと、こんどは、どちらが美しくなれるかといわぬばかりに、負けず劣らずにみごとな色合いとなりました。

年雄くんは、これを見ると、なんとということなく悲しくなるのです。そして、ぼんやりと遠い過ぎ去つた日のことを考えるのであります。考えても、まだ小さかつた日のことは、はつきりとわかりません。ちようど、庭を照らしている初冬の弱い光のように、ところどころ夢のような記憶に残っているばかりでした。ただ、その日のことをお父さんや、お母さんから聞いて、

「ああ、そうであつたか。」と、思つばかりでした。その日のことというのは、やはり、こうした寒い、さびしい日のことでした。兄さんと二人は、お縁側で遊んでいました。そこには、このお父さんの大事になされているゆずの植木鉢が、置いてあつて、しかも たつた一つ大きい実が、枝になつていたのであります。

このとき、兄さんは七つで、年雄くんは五つでした。

「僕、このゆずがほしいな。」と、年雄くんはいいました。

「それは、たべられないのだよ。」と、兄さんが、いいました。

「おいしくないの？」

「ああ、すつぱくて、たべられないのだ。」

兄さんは、そう返事をして、うしろを向いて、おもちゃの汽車を走らせていました。

「ポオー、うえの、うえの、ポオー、あかばね、あかばね——。」

そのうちに、汽車はひつくりかえりました。

「年ちゃん、汽車がてんぷくしたよ、たいへんだからきておくれよ。」と、兄さんは、弟の年雄くんを呼びました。けれど、返事がありません。遊びに気を取られて、弟がなにをしているかも知らなかった兄さんは、はじめて弟の方に目を向けたのでした。そして、なにを発見したでしょうか。

「あつー！」と、兄さんは、その瞬間おどろきの目をみはったのです。

「年ちゃん、ゆずをもいでしまったのかい？」

兄さんは、弟が、ゆずを持って、うれしそうにながめているのを見ると、そばへ走ってききました。

「たいへんなことをした。お父さんにしかられるよ。」と、兄さんはいいました。

こう、いわれると、さすがに、年雄くんの顔にはいままでの明るい、うれしそうな色は失せてしまつて、急に悲しそうな、泣き出しそうな顔つきとなりました。

やさしい兄さんは、これをおかしいと思うたのでしよう。

「いいよ、年ちゃん、知らんでしたのだから……。」

そういつて、自分が、枝からはなれたゆずを手にとって、それがついているときのように枝へつけて見ていたのでした。

「たいそうおとなしいのね。そこで、二人はなにをして遊んでいますか。」と、お母さんが、入ついたらつしやいました。すると、ふいに兄さんは泣き出しました。つづいて年雄くんも泣き出しました。

「だれです、ゆずをとつたのは？」

お母さんは、目をまるくなさつて、大きな声で叫ばれました。

茶の間で、新聞を見ていらしたお父さんが、これをききつけて、

「なに、ゆずをもいだ？」といつて、足音荒々しく、縁側へ出てこられると、怖ろしい目で、にらみつけて、

「おまえか？」と、ゆずを持つている、兄さんの頭をパチパチとなぐられました。

「わるいいたずらをするやつだ、せっかく大事にしているものを。」

お父さんは、顔を真っ赤にして、怒られたのであります。

このとき、兄さんは、なぐられながら黙っていました。年雄くんは、ただ怖ろしいので、小さくなつて、ふるえています。そして、兄さんがしたのでないことは、その後になつて、年雄くんの口からわかつたのでした。

「ああ、そうだったか。」と、お父さんは、はじめてやさしい兄さんの心持ちを知つて、自分のしたことを後悔なされました。

このやさしい兄さんは、その翌年の春、疫癘を患つて、わずか一日で死んでしまったのでした。

年雄くんは、いつしか兄さんの年となりました。いま、一人で、ゆずの実を見て、やさしい兄さんのことを思い出していたのです。

いいお天気でした。お父さんは、庭へ出て、倒れかけたコスモスに竹を立てて、起こしにいらつしやいました。やがて、年雄くんのいる縁側へきて、お父さんは、腰をおかけになりました。

「おお、いい色いろになったな。」と、お父さんとうは、ゆずをごろんになっていました。

「年としや、あすこにあるはさみをもっておいで。」と、お父さんとうは、おっしゃいました。年と雄しおくんは、さっそくはさみを持ってきて、お父さんとうに渡わたしながら、

「なにをなさるの?」と、ききました。

「きって、仏ほとけさまに上あげるのだ。」

ゆずを見て、お父さんとうも、やさしい兄にいさんのことを、思い出だしなされたのでありました。



# 青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 1」講談社

1977（昭和52）年9月10日第1刷発行

1983（昭和58）年1月19日第5刷発行

底本の親本：「小学文学童話」竹村書房

1937（昭和12）年5月

※表題は底本では、「ゆずの話《はなし》」となっています。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：酒井裕二

2016年9月9日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# ゆずの話

小川未明

2020年 7月18日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>